

心理音響学は、聴覚障害と直接関係する音の基本を学ぶ学問である。しかし、いわゆる音響学として講義をした場合には、難しいとか今ひとつわからなかったで終わってしまうことが多い。そこで、専門への誘いの講義として位置づけるために、自分たちがこれから学ぶ学問領域への興味を持たせることが大切であると考えた。そのためには、学生が自らの身の回りの音や音声の音響的な現象について、「何故?」、「どうして?」という問題意識を持ち、それらの現象を実験的に再現する中で、理論的説明を探っていくことにより、学ぶ意欲が高められるのではとの思いの中で、今回の取り組みをした。

前年度に同じような試みをしたが、この授業の内容や分野への興味や関心は、持てたのが63%、ある程度持てたのが38%であった。授業の理解度は、ある程度理解できたのが、38%で、あまり理解できなかったのが63%であった。また、「この授業はあなたが教師になるための力となると思うか」については、思うのが38%、ある程度思うのが50%、あまり思わないのが13%であった。自由記述でも見られたように、一番多かったのが、内容が難しかったが、楽しくて興味や関心が持てたとの感想であった。しかし、「内容が難しくって、教科書で予習をしたり、配布された資料を見てもなかなか理解できないところがありました。ただ、配布された資料は具体的な説明や図が記されていたので、内容を完全に理解するまでに至らなくても、自分の中である程度理解・整理するために大変役立ちました。内容理解で苦しむことも何度かありましたが、この授業で教わったことは確実に将来の進路の力になると思います。」や、「一人で学習すると、疑問だらけで、理解不足であることがよく解りました。まだまだ学習を始めたばかりなので、これからも音に関する授業を受けて理解を深めたいと思いました。自分で出した音を分析したり、模型を使ったりする目に見える具体的なものがある時は理解しやすかった。」などの感想もあった。

こうしたことを踏まえて、今期は内容をもう少し厳選し、理解を深めるために、音とい

う物理現象ときこえという人間の感覚との関連について丁寧に説明し、9割以上の学生が理解できるまで、何度か説明をし直すことを意識的に行った。

以下、今年度のアンケート結果をまとめてみる。この授業の受講生は、全員1年生で、特別支援教育専攻の7名と他専攻2名の9名の受講であった。1 昨年と同授業の受講生9名との比較をしてみると以下の様になった。

1, 授業への参加について

	本年	21年
①授業への出席		
90%以上	7人	8人
70%以上	2	1
②出席した授業で集中した時間の割合		
90%以上	1	3
70%以上	6	5
50%以上	2	1
③授業の予習・復習時間		
1時間程度 88%	5	8
ほとんどしなかった	4	1

2, 授業内容について

④授業の目標や意義の提示		
ある程度提示された	<u>9</u>	5
あまり提示されなかった	0	2
提示されなかった	0	2
⑤授業への興味・関心		
持てた	<u>3</u>	0
ある程度持てた	6	6
あまり持てなかった	0	3
⑥授業からの新しい知識や考え方		
得られた	5	7
ある程度得られた	4	2
⑦授業の理解		
ある程度理解できた	4	3
あまり理解できなかった	5	6
⑧将来の教員や ST の基礎的な力になるか		
思う	<u>7</u>	3
ある程度思う	2	5
あまり思わない	0	1

3, 授業の方法

⑨教員の話し方や進行具合		
適切だった	5人	5人
大体適切	4	4

⑩質問や発表の機会			
十分あった	7	8	
ある程度あった	2	1	
⑪板書・資料提示・配付資料の適切性			
適切だった	6	6	
大体適切	3	3	
⑫課題の量と質			
適切だった	5	5	
大体適切	3	4	
やや不適切	1	0	
⑬授業の準備や工夫			
思った	3	3	
ある程度思った	6	5	
あまり思わなかった	0	1	
4, その他			
⑭自ら進んで取り組んだか			
取り組んだ	1	1	
大体取り組んだ	8	7	
あまり取り組まなかった	0	1	
⑮担当教員の熱意を感じたか			
感じた	8	8	
ある程度感じた	1	1	
⑯授業への満足			
満足した	3	3	
大体満足した	6	6	

5, 教育学部の DP について

	知らない	知っている	合計
	5人	4人	9人

DP 1 : 特別支援教育に関する確かな知識と得意とする分野の専門的知識を修得している。(知識・理解)

向上していない	0	0	0
どちらかといえば向上していない	1	0	1
どちらかといえば向上	3	3	6
向上した	1	1	2

DP 2 : 聴覚言語障害児, 知的障害児, 肢体不自由児, 病虚弱児, 重複障害児, 発達障害児等の教育現場で生じているさまざまな教育課題について論じ, 適切な対応を考えることができる。(思考・判断)

向上していない	1	0	1
どちらかといえば向上していない	0	1	1
どちらかといえば向上	4	3	7
向上した	0	0	0

DP 3 : 子どもの発達に応じた授業の構成や教材・教具の工夫ができ, 個に応じた指導や説明ができる。(技能・表現)

向上していない	1	0	1
---------	---	---	---

どちらかといえば向上していない	2	4	6
どちらかといえば向上	2	0	2
向上した	0	0	0

DP 4 : 特別支援学校, 特別支援学級, 及び通常の学級等において, 特別支援の実践を経験し, その実践を省察することで, 自己の学習課題を明確にし, 理論と実践を結びつけた学習ができる。(関心・意欲)

向上していない	1	1	2
どちらかといえば向上していない	1	3	4
どちらかといえば向上	3	0	3
向上した	0	0	0

DP 5 : 特別支援教育に対する使命感や責任感を身につけ, 教育的愛情を持って児童・生徒に接することができるとともに, 多世代にわたる対人関係力を身につけ, 社会の一員として適切な行動ができる。(態度)

向上していない	0	0	0
どちらかといえば向上していない	0	1	1
どちらかといえば向上	5	3	8
向上した	0	0	0

以上の結果より, 1の授業の参加や3の授業方法やその他は例年大きな変化はなかった。しかし, 今回の授業は, 講義と実験を中心に構成し, 如何に学生の受け身的な姿勢から積極性を引き出すかがポイントであった。日常何気なく生じている音や音声の現象を専門の視点から新ためて取り上げ, どうしてなのか, どうすれば, その現象を説明できるのかを考えさせた。その結果, 授業内容については, 授業の目標や意義, および関心興味, および将来への教員や ST への展望は向上した。こうすることにより, 日常の受け身の姿勢から, 多少とも積極性を引き出せたものと思われる。しかしながら, 新しい知識については十分には評価されなかったもので, 次年度以降, 新たな知識や解釈の見識を示すことを試みてみたい。このことは, 教育学部の DP との関連からもいえる。DP の既知, 未知に係わらず, DP 1, 2, 5 は, 「どちらかと言えば向上している」との評価が多かったが, 子ども像との関連 (DP3) や, 実践との関連性 (DP4) が不十分だったのか, 「どちらかといえば向上していない」との評定がなされた。この点は次年度の課題である。また, DP を知らない学生が半分近くいたので, DP の周知徹底が, 今後の重要課題であると思われる。

